

本島通信

本島大教会 神殿講話(要旨)

【立教182年10月22日】

発行所 〒763-0223 香川県丸亀市本島町泊268
天理教本島大教会
 電話 0877-27-3321 (代)
 本島通信編集室 R.191024-1028-20
 奈良県天理市指柳町 270-1
 本島話所 〒632-0093
 電話 0743-63-1571 (呼)
 Email: news@honjima.com
 発行部数: 897部 (先月比±0)
大教会 朝夕おつとめ時間
 【11月1日~12月31日】
 朝づとめ 午前6時45分
 タづとめ 午後6時00分

教祖のひながた通り どこまでも明るく勇んで

大教会世話人 宮森与一郎先生

本日は本島大教会の秋の大祭に参拝させて頂きましたので、少し思うところをお話させて頂きたいと思えます。



聞かしてもらいますと、昨日の役員会議で、今日の大祭からご参拝の皆様も共にみかぐらうたを唱和してもらおうと、祭典前に全員で声出しをして、おつとめに臨むことが決まったとのことでした。

おちばでも、おつとめの時は皆さんみかぐらうたを唱和して下さっています。これは昭和9年、教祖誕生祭が始まる前に当時の本部長松村吉太郎先生が、ご参拝の皆様にご参拝の皆様にこのように仰ったからであります。

「本日のこのおつとめを機として、今後は毎月の月次祭の時も、ご参拝の皆

様は、その席上で座ったままお地を唱えて頂きたいのであります。」
みかぐらうたの中に、
よるひるどんちやんつとめする
そばもやかまじうたてかる(四下り目)
とあります。

この本島大教会は、どれだけ大きな声を出しても、どれだけ鳴物を大きく鳴らしても、側に「うるさいな」と思う人はいませんが、部内教会では、ご近所があって、精一杯おつとめをつとめると、「うるさいな、やかましいな」と思われることかと思えます。

どうかそういうおつとめをつとめて頂きたいのであります。「天理教また何かやつとるなあ」と思ってもらえるよう、そういうおつとめをどうか心がけて、まず大教会で、皆さんが心を揃えて大きい声で勤め、そして部内の教会もそれぞれ、それにならって頂きたいのであります。

さて、ちょっと話は変わりますが、少し以前に、おちばにコロンビアから来た青年A君がおりました。
彼は母親と一緒にアメリカに渡り、ボストンに住んでいました。

そしておちばへ来て、天理教語学院で勉強して、修養科も検定講習も終えまし

たので、アメリカに戻ろうとした矢先に9・11の事件が起きました。そして入国審査が厳しくなり、ついに彼はアメリカに戻れなくなりました。
仕方がないので、そのままおちばでひのきしんを重ねる日々を続けておりました。

彼はスペイン語、英語、そして日本語もよく出来ましたので、おちばの海外部としては、大きな期待を寄せていました。彼のような人材が海外布教に出てくれたら嬉しいのに、残念だなと思っていたのであります。
それでもおちばで一生懸命ひのきしんをしてきていました。

そんな中、天理大学に留学に来ていたウクライナ人のIさんと知り合い、お付き合いを始めたようです。ところがIさんは留学生ですから、その後ウクライナに帰りました。

しばらくしてA君は私の元へ「ウクライナへ行きたいから休みを下さい」と言いに来ました。初めはダメだと言ったのですが、毎日のように休みを下さいと言いに来ますので、私も根負けして1週間だけ行ってきてよろしいと答えました。

ウクライナのキエフへは、日本からトルコのイスタンブールを経由して行

くそうです。ところがイスタンブールの空港で書類上の不備から4日間も乗り継げず、かの地でなんとか過ごして、ようやくキエフに行き、そこでIさんと結婚の約束をして、おちばに帰ってきました。

その後、Iさんと家族はおちばがえりされ、A君と結婚しました。そしてIさんは一人娘でしたから、A君にウクライナへ来て欲しいという話になり、今はウクライナで布教所を開設し、お道の御用に励んでくれています。

人生とは分からないものです。アメリカには戻れない。コロンビアには家がない。せつかくの人材なのに、なぜこうなってしまったのかと思つていたところ、今はウクライナで布教所を開設して、ようばくも10人ほど出ています。不思議なものであります。

明治22年5月27日のおさしづに

「さあく、何かの処、道有れど道無いと思つ心、成る理を成らんように思う。成らん理を成ると思つて、めんく、の理を立てる。一時どう成ろうと思えども、さあく、治めるでく。」とあります。

神様は道をつけようと思つて下さつているのでありますが、我々が勝手に「もうあかな」と思つてしまふ。そう

すると成るところも成らなくなつてしまふわけでありませう。成らんところを成るようにしてもらうのがこのお道であります。それは教祖ひながたの道に全て教えて下さっているのであります。

今日は教祖の50年にわたるひながたの道の中で、天保9年、教祖41歳から明治8年、教祖が78歳までのいくつかの重要な年を振り返りながらお話をしたいと思います。

一つ目は、嘉永6年(1853)教祖の夫、善兵衛様が出直されたふし。二つ目は、元治元年(1864)大和神社のふし。そして三つ目は明治7年(1874)山村御殿のふしについて、振り返りながら、今の私たちの信仰の在りどころを探つてみたいと思ひます。

「我は元の神・実の神である。この屋敷にいんねんあり、このたび、世界一れつをたすけるために天降つた。みきを神のやしろに貰い受けたい。」とは、教祖のお口を通じての初めての親神様よりの啓示でありました。

これに対して、いままでに聞いたことのない神名であり、思いも寄らぬお啓示であつたので、中山家のご家族や親族の方々は一同揃つてお断りを申されたのであります。

しかし、親神様は頑として引かれなかつたのであります。夜を日に継いで3日の間、押し問答が続いた末に、このままでは教祖の一命のほども氣遣われる事態となつたので、遂に教祖の夫善兵衛様は、事ここに至つてはお受けするより他に道はないと思ひ定め、堅い決心のもとに、「みきを差し上げます。」とお受けになつたのであります。天保9年(1838)10月26日朝五つ時の午前8時のことではあります。

教祖の50年にわたるひながたの道はここから始まります。月日のやしろとなられた教祖は、「貧に落ちきれ。」と、急ぎ込まれる親神様の思召しのもとに、嫁入りのときの荷物をはじめ、食べ物、着物、金銭に至るまで、次々と施していかれたのであります。

家財道具はもとより、田畑や山林まで手放していく姿に、親戚や友人はそれまでのつきあいを止めてしまい、村人達は陰口や嘲りの言葉を言い立てたのであります。

ここで一つ、不思議に思ふのは、教祖のご家族はどうされていたのでしょうか。特に教祖の夫であり、中山家の戸主である善兵衛様の心境はいかがだつたのでしょうか。

大和地方は昔から先祖伝来の土地や財産を守り抜いていくという氣風の強い土地柄であります。また当時は家族の中では家長たるものが絶対の権限をもつていた時代ではなかつたでしょうか。善兵衛様は教祖より10歳年上であります。先祖伝来の財産を次々と失つていく姿に、さぞかし世間からは甲斐性無しやと嘲り、そしられたことであつたでしょう。

親戚縁者、村人達の中傷と嘲りは教祖に対してはもちろんのこと、当然、善兵衛様にも向けられていたはずであります。世間の常識と教祖との間での苦しみはいかばかりであつたでしょうか。

稿本天理教教祖伝によると、善兵衛様は、ある夜、教祖の枕許に、白刃(短刀)をかざし、「憑きものならば退いてくれ。氣の間違ひなら元に戻つてくれ」と迫られているのであります。「あなた何しておいでか」と問われる教祖に対して「どうも恐ろしゅうてならぬ。」と答えられているのであります。

信じられない氣持だと、守つていかねばならないという、なんとも言えない揺れ惑つ心理を現している言葉のように思ひます。

それでも周囲の反対の中、苦しい立場を堪え忍んでいかれたのは何故だつ

たのでしょうか。

親神様がこの世人間を創造なされる時に、善兵衛様は道具衆となられた魂をお持ちだったからでしょうか。

天保9年10月26日に堅い決心の元に、「みきを神のやしるに差し上げます」と答えられた約束を守り続けようとされたからでしょうか。

いずれにせよ教祖と共に歩まれた善兵衛様は、教祖が月日のやしるとお定まりになって16年目の嘉永6年にお出直しになるのであります。

この嘉永6年が一つ目の節目の年でありました。この年、善兵衛様66歳、教祖は56歳であります。唯一、懸命に教祖を守られた善兵衛様のお出直しであります。

そして同じ年、中山家の母屋も手放されたのであります。母屋は屋敷内を中心となる住居の建物です。雨露をしのぎ、身体を休める安らぎの場所でもあります。

教祖を守ってこられた善兵衛様が出直されたと同時に、中山家ご家族を守ってきた母屋までも人手に渡されたのであります。天保9年以來、貧に落ち切られていく中に、いよいよ中山家の困窮はここに極まった感があります。しかしこの年、教祖のとられた行動

は、親神様の神名を流すべく、こかん様を浪速、道頓堀の地へと送られたこととでありました。

そして続く安政元年(1854)、初産のために帰っておられた教祖の三女おはる様のお腹に息を三度かけ、三度撫でて置かれたのであります。これがをびや許しの始めであります。

をびや許しによって不思議な御守護を頂き、安産をさせて頂いた人達が現れ、その噂は近在へと広まって、教祖は只人ではないと、ようやく気づき始めたのであります。

おさしづに、
 ずつない事はふし、ふしから芽を吹く。やれふしや／＼、楽しみやと、
 大きな心を持つてくれ。(明治27・3・5)
 また、

もうあかんかいなあ／＼というは、ふしという。精神定めて、しつかり踏ん張りてくれ。踏ん張りて働くは天の理である、と、これ諭し置こう。

(明治37・8・23)

とあります。

教祖はふしに直面したときこそ、神名を流し、をびや許しを渡し始めておられるのであります。大きい心で世界たすけに向かつておられるのであります。

我々にも「何でこんなこと」と思う

ことが起こります。また「なんでこんな時に」と思うこともあります。

辛いこと、苦しいこと、悲しいことが起こったならば、それはふしであります。その時に「何故なのか」と原因を考える必要はありません。悔やんだり、誰かのせいにしたたり、不足に思う必要もありません。

明治22年1月15日のおさしづに
 何が間違つてある。思う心が間違つてあるから速やかならん。一つ定まればいつ／＼まで一つ事情治まる。とあります。

今日のポイントの一つ目は、ふしに直面した時には、あれこれ悩んだり、人を責めたりすることではなく、むしろ「今、何が出来るか」「今、何をすべきか」を考えることとあります。

ふしに直面したときこそ、今まで出来なかつたことが出来るようになれば最高です。それが些細なことでも、小さな前進でもいいのではないのでしょうか。

二つ目の節目の年は、をびや許しのはじめよりちょうど10年後、元治元年(1864)教祖67歳であります。

この年、後に本席となられる飯降伊蔵先生が入信されます。妻のおさとさんとの産後の思いをお救い頂かれての入

信でありました。

「お救い頂いたお礼にお社なり」と願い出られた飯降先生に対して教祖は「社はいらぬ。小さいものでも建てかけ」と仰せられて、つとめ場所の普請がはじまります。

「一坪四方のもの建てるのやで。一坪四方のもの建屋ではない。」

「つぎ足しは心次第」

と仰せられたのであります。

その時居合わせた人々は三間に六間ものものを建てようと決め、山中忠七先生は費用を、飯降伊蔵先生は大工の手間一切を、辻忠作先生は瓦を、中田先生・西田先生は畳と、それぞれ心を定めたのであります。

普請は進み、この年10月26日棟上げが行われました。

経済的に困窮される中山家にあつては、棟上げのお祝いも振る舞いも十分出来なかつたので、翌日27日、信者の人たちは棟上げのお祝いのために、大豆越村の山中忠七先生宅へ向かうこととなつたのであります。その道中、

大和神社の前で、拍子木や太鼓を打ち鳴らし、「なむ天理王命、なむ天理

王命」と唱えたのであります。それは、

「神前を通る時には、拝をするように」との教祖のお言葉があつたからであり

ます。しかしそれによって、その場にいた人たちは、大和神社の祈祷の妨げをしたとして、取り調べを受け、3日間社務所に留め置かれることとなったのであります。

再び大きなふしを迎えます。このふしから不安を感じて信仰から離れる者もでて、そのためお屋敷へも一時はぱったりと人の足が遠のいたのであります。

せっかくおたすけ頂いた人々が増え始め、お屋敷へ人々が寄り集う様子となってきた矢先のことです。

天保9年以来、困窮することばかり続く中山家にとっては久々のお祝いごとであったというのに、なんとということでしょうか。

ふと、「こかん様が」行かなんたら宜かったのに。」と眩やかれたところ、「不足言うのではない。後々の話の台である程に。」

と教祖のお言葉でありました。ふしから芽が出る。これが教祖のひながたの道であります。

この大和神社の大きなふしの後、慶応2年(1866)教祖は初めて、

あしきはらひたすけたまへ てんりわうのみこと

とおつとめの歌と手振りを教えられる

のであります。

これより明治8年までかかって、教祖はおつとめの地歌と手振りをお教え下されたのであります。

元始まりのお話に、

「最初に産みおろされたものは、一樣に五分でありましたが、五分五分と成人して、九十九年経って三寸になりました時、皆出直してしまい、父親なるいざなぎのみことも、身を

お隠しになりました。けれども、一度教えられた守護により、いざなぎのみことは、更に元の子数を宿仕込み、十月経って、これをお産みおろしになりましたが、このものも、五分から生れ、九十九年経って三寸五分まで成人して、皆出直してしまいました。そこで又、三度目の宿仕込みをなされましたが、このものも、五分から生れ、九十九年経って四寸

まで成人致しました。その時、母親なるいざなぎのみことは、『これまでに成人すれば、いずれ五尺の人間になるであろう』と仰せになって、

につこり笑うて身をお隠しになりました。そして、子等も、その後を慕うて残らず出直してしまいました。

その後、人間は、虫、鳥、畜類など、八千八度の生れ更りを経て、

又もや出直し、最後に、めざるが一匹だけ残りました。」

とあります。

今日のポイントの二つ目は、ふしの

たびごとに、一度は振り出しへ戻ってしまふように思うけれども、再び初めから成人の努力をやり直すところに、以前よりも成長した姿へと導いて下さるといふことであります。

一つ目のふし、嘉永6年の夫善兵衛様の出直し、母屋が取毀ちの時は、神名を流し、をびや許しによって不思議な御守護をお見せ下さり、それから10年の後、二つ目のふし、元治元年の大和神社のふしの折には、おつとめを教えにかかられたのであります。

ふしのたびごとに前回よりも成人した姿へと導いて下されているのであります。

さて、元治元年の大和神社のふしよりさらにちょうど10年後、明治7年にあります。

この年教祖は、仲田儀三郎、松尾市兵衛のお二方に、

「大和神社へ行き、どういふ神で御座ると、尋ねておいで。」

と、ご命じになります。教祖から問答を仕掛けておられるのであります。

これをきつかけとして、この年12月23日奈良県庁社寺掛は、教祖に対して

「証拠守り」として今もお渡し下されているのであります。

明治7年ご執筆のおふでさき三号に、

いまの事なにもゆうでハないほどにさきのをふくハんみちがみへるでいまのみちいかなみちでもなけくなよさきのほんみちたのしゆんでいよしんぢつにたすけ一ぢよの心ならなにゆハいでもしかとうけとる

(おふでさき三号36〜38)

とあります。

教祖におたすけ頂き、教祖について

きている人たちであつても、当時のお道はこの先、どうなつていくやら分からない不安な状況であります。

しかし教祖は、「心配ない」と仰せられています。「楽しんでいよ」とも仰せ

られています。

とあります。

とあります。

とあります。

られています。

今の私達だって、先の事は分からないのであります。一つのふしが起れば、動揺してしまふのであります。

しかしふしの時にこそ、大切なのは、我が身を嘆き悲しむよりも、我が心をたすけ一条の心に切り替えるということとであります。これが、今日の三つ目のポイントです。

おさしづに

勇めば勇む。心の理に楽しみと言う。

いかなる処も入り込むと言う、守護

と言う。(明治26・1・21)

とあります。

不思議なことに、人を励まし、勇ませているときは、自分が勇んでいます。人に対して「大丈夫やで」「安心して」

「まかせて」と言っているときは、なんだかこちらが勇んでいます。人を勇ませ、自らが勇む時に、親神様のご守護は現れます。

やはり教祖はこのふしの翌年、明治8年に「いちれつすますかんとるだい」を教え、そしてちば定めをされます。

かぐら面や、鳴物などの道具を揃え、みかぐらうたを教え、手振りを教え、かぐらづとめをつとめる場所を明かされていくのであります。

おさしづに、

ふしという、ふしから世界治まる。さあ〜勇む〜。世界も勇むで。(明治27・5・2)

とあります。教祖自らが、大ふしの中

をいつも勇んだ姿で通り抜け、どんな艱難苦勞の中も、私たちをよろづたすけの道へと、つとめ完成への道へと、成人できるようにお導き下されているのであります。

明治8年にご執筆のおふでさき第十号には、

月日にハなんでもかでもしんぢつを

心しいかりとふりぬけるで(第十号99)

このみちを上まぬけたる事ならば

ぢうよぢざいのはたらきをする

(第十号100)

とあります。

その頃、教祖は

「もう一度こわい所へ行く、案じな。」

と仰せられて居たのであります。「案じな」とは「心配するな」という意味です。

親の心を伝え、心構えを論し、ふし

のたびごとに揺らぐ人々を励ましながら、明治8年以降の激しさを増す迫害弾圧の時代へと教祖は自ら向かってい

かれるのであります。

みました。

皆案じるやない。元々一つの理を思い、前に十分の理を論してある。案じる事は要らん。案じは案じの理をまわす。案じは要らん。(明治22・7・13)

とおさしづにあります。「元々一つの理を思い」とは、陽気ぐらしをさせてやりたいとの親神様の親心という意味であります。「前に十分の理を論してある」とは、教祖がお通り下されたひながたの道に、陽気ぐらしへの道しるべを教えるということ意味ではないでしょうか。

私たちには教祖が通って下されたひながたの道があります。教祖がお通り下された道からすれば、今の私達はなんと往還道を辿らせて頂いてることでしょうか。

何があるうとも教祖のひながたを思えば、勿体ない限りであります。「案じること要らん」と仰せられているごとく、親神様にもたれて、教祖のひながたをたよりに、共々にどこまでも明るく、陽気におつとめを勤めて、どんな中でも自ら勇み、人を勇ませて、おたすけに励ませて頂きました。

ご静聴ありがとうございます。

(文責・片山幹太)

計報 本米分教会前会長

白鳥徳好氏



白鳥徳好氏(本米分教会7代会長)は10月14日午前9時22分お出直しになりました。享年83歳。

葬儀は、みたまうつつが10月22日午後6時より、告別式が翌23日午前10時より、片山好治本米分教会会長齋主のもと、横浜市内の葬祭場にて執り行われました。告別式に大教会長が参列しました。

白鳥徳好氏略歴 昭和11年6月24日生まれ。昭和30年12月17日、おさづけの理拜戴。同年12月27日、修養科第174期修了。昭和51年11月19日、教会長資格検定合格。昭和52年1月17日、教人登録。昭和54年12月26日、本米分教会7代会長拜命。立教181年10月26日、同教会長辞任。

教会長在職期間38年10ヶ月間。

人材育成は 理の御用を通して

10月大教会教会長会議

立教182年10月22日

大教会長 片山幹太



この10月は立教の月、たすけ一条の道が始まった月であります。世界には、おたすけを必要としている人々が大勢いらっしゃいます。秋季大祭を勤める意義は、私たちに身上げや事情で難儀されている方に親神様の

たすけ一条の道をお伝えする使命があることを再確認するところにあるのではないかと思います。

そのためには何が大切でしょうか。

立教の天保9年、教祖の夫善兵衛様が人間思案を断ち、一家の都合を捨て、堅い決心のもと、「みきを差し上げます」とお受けなされました。そのご決心まで3日間かかりました。

このお道を歩ませて頂く上で、邪魔になるのは人間思案と一家の都合ではないかと思えます。私たちは陽気ぐらし建設のため、人だすけに勇んで邁進したいと思えます。

次に人材育成です。

先月(9月)の本部神殿講話で西浦忠一先生は、「人材育成は居場所づくりが鍵、理の御用を通して成人へと導こう」と題してお話されました。

理の御用とは、にをいかけ、おたすけはもちろんのこと、教会の御用、大教会や詰所ひのきしんも理の御用です。理の御用の姿は千種万態で、親神様への心の向きの問題とも言えます。

人材育成には、理の御用に徹してもらうことに、専念していきたいと思えました。

ありがとうございました。

(文責・本島通信編集室)

大教会人事

去る10月22日大教会教会長会議において、大教会役員ならびに准役員の登用が行われました。

役員登用



おおにし 知
大西 知
(カリフォルニア
教会長・63歳)



いわはし りゅうぢょう
岩橋 竜造
(本清水分教会
長・53歳)



ひらい しんじろう
平井 真治郎
(樺太分教会長・
51歳)

准役員登用



たか がき みつ はる
高垣 光治
(崇徳分教会長・49歳)



くもい はる ひこ
雲庵 春彦
(本九分教会長・47歳)



いわはし もと ひろ
岩橋 元博
(マリノ教会長・46歳)



かた やま ただ あき
片山 直明
(本壱分教会長・45歳)



かた やま かず のぶ
片山 和信
(ポートランド教会
長・43歳)

秋季大祭 祭典役割

獻饗長 井上哲
伝供 西山道教・吉田晴雄・大西知・平井真治郎・向所隆文・永島宗行・大上道徳・原口実・伊東康成・高島栄造・片山和信・茶屋原良昭・滑川善久・香川勝己・渡部友見・鎌田典夫・阿部盛夫・宮路茂照・山下英久・須崎晴道

村田輝夫・川村吉夫・柴田久生・時久英次・溝口晋太郎・石井常正・倉嶋孝明・宮路和徳
雅楽奉仕者 文岡育則・高垣光治・雲庵春彦・大矢万三・横関茂治・片山直明・長尾海一・岩橋守行・香川真範・鎌田康典
 (順不同)

祭主 指図方	大教会長	座りづとめ	てをどり前半	てをどり後半
	鳥澤繁實			
地方	岩橋慶三	長谷川邦昭	大上道徳	片山直明
	片山肇	大西知	片山直明	肥後章
てをどり	大教会長	老木邦光	平井真治郎	岩橋守行
	片山勲	窪田靖明	岩橋守行	山下英久
ちやんぼん	寺本教生	向所隆文	片山和信	石井常正
	高島清弘	久尾マーク	片山和信	石井常正
拍子木	岡崎俊郎	吉田晴雄	長尾海和	宮路和徳
	鳥澤繁實	原口実	宮路和徳	高島栄造
太鼓	齊藤カレン	後藤正治	高島栄造	高垣光治
	西山道教	永島宗行	高垣光治	高垣光治
すりがね	片山榮	和田敏恵	大西わきえ	梅木澄代
	老木加代子	雲庵まち子	梅木澄代	梅木澄代
三味線	老木加代子	雲庵まち子	梅木澄代	梅木澄代
	老木加代子	雲庵まち子	梅木澄代	梅木澄代
胡弓	老木加代子	雲庵まち子	梅木澄代	梅木澄代
	老木加代子	雲庵まち子	梅木澄代	梅木澄代
神殿講話	世話人宮森与一郎先生	世話人宮森与一郎先生	世話人宮森与一郎先生	世話人宮森与一郎先生

秋季大祭祭文

立教百八十二年十月二十二日

この神床にお鎮まり下さいます親神天理王の御前に、天理教本島大教会長片山幹大慎んで申し上げます。

親神様には、一れつの陽気ぐらしを楽しみに、この世人間をお創め下さり、天保九年十月二十六日、旬刻限の到来と共に、教祖をよろしに、この世の表にお現われ下さり、よろづいさいの元を明かし、世界たすけの真実の御教えをお啓き下さいました。

爾来、百八十二年、長の道すがらには幾重の節もお見せく下さり、常にか温かい親心をもって、お連れ通り下さいます御慈愛の程は誠に有難く勿体ない極みでございます。

私共は、届かぬながらも御厚恩にお応えさせて頂けますよう、日々、心のはこりの掃除に努め、勇んでたすけ一条に励ませて頂いておりますが、その中にも今日のこの月は、当大教会にお許し戴いた、秋の大祭を執り行う意義深い日柄でございますので、只今から、おつとめ奉仕者一同、立教の元一日の親の御心を心に湛えて、鳴物の調べと共に、一手一つに心を揃え、陽気に勇んで座りづとめ、てをどりを勤めさせて頂きます。

御前には、国の内外から大勢の教え子たちが帰り集い、喜びの心も一入に、おつとめを拝し、おうたを唱和して、日頃賜る御守護に、御礼申し上げ、尚も変らぬ親心にお継りする真実の状を御覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

尚、本日は大教会世話人、宮森与一郎先生のお入り込みを賜り、時句のをやの御思をお聞かせ下さいますので、教会長、よふばく、信者一人ひとりが漏れることなく、尊いばの理を頂戴して、思召し下

さる成人への足取り進めさせて頂きたいと存じます。また、おぢばでは、二十六日の秋季大祭に続いて、二十七日には「第九十五回天理教青年会総会」が、さらに十一月三日には「第二十九回女子青年大会」が開催されるに際しましては、一人でも多くの方々をお連れして御存命の教祖にお喜び頂き、世界たすけの道を支え道の後継者の育成と丹精に、真実の限りをつくさせて頂く所存でございます。

更には又、年頭に定めました心定め目標に向って、余すところ約二ヶ月となりましたが、私共一人ひとりにおかけ下さり、御用を粘り強く務めて、積り重なる御厚恩にお報いさせて頂きたいと念じております。

何卒、届かぬ私共ではございますが、この上共、時句のひとつだけの輪が大きく広がり、教会内容の充実と共に、陽気ぐらしの世の状を一日も早くお見せ頂きますよう、お連れ通りの程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。(原文のまま)

入社祭

(立教182年10月22日)

▼本恵山△金田 一郎 ▼栄森峰△西森 俊彦

【計2名】

10月22日(火)
【香川県丸亀市】

天候 晴時々薄曇
 最低気温 15.7℃
 最高気温 25.6℃
 平均気圧 1013.2 hPa
 平均湿度 72%
 平均風速 1.9 m/s
 日照時間 7.2 時間
 降水量 0.0 mm

各地の動き

穴井隆将氏おかえり講話

本島詰所では10月26日午後3時より4階講堂において、穴井隆将氏あないたかまさ(天理大学柔道部監督)によるおかえり講話を開催し、約180名が聴講しました。



穴井氏の好きな言葉は「努力」。09年全日本柔道選手権ならびに10年世界柔道選手権で優勝し、周囲の大きな期待を背負いながらも12年ロンドン五輪で2回戦敗退。引退を決意して臨んだ13年全日本柔道選手権で2度目の優勝を果

たした経験を語り、「報われない努力はある。しかし、無駄な努力はない」と、現在は後進の指導に当たられています。約60分間の講話に続いて30分間の質疑応答も途切れることなく、大変実のある講話でした。

赤峰別席団参

赤峰分教会(向所隆文会長)では、10月26・27日に赤峰別席団参を実施。帰参者約350名。団参の2日間で初席10名、中席26名が別席を選び、をびや許し4名、証拠守り5名が願い出ました。

26日の本年秋季大祭終了後西礼拝場において全員でお礼づとめを勤めました。

子どもおちばがえり帰参集計

少年会本島団(岩橋竜造団長)より、立教182年子どもおちばがえり帰参者数は、少年会員338名(初参加52名、わかぎ59名)、育成会員545名、合計853名(110教会)と報告されました。

おてふりお手直し



世話人・宮森与一郎先生による第3回おてふりお手直しが、10月24日午後4時より1時間、本島詰所北棟一階和室で行われ、大教会長夫妻を始め、この日詰所に居た役員、准役員、直轄教会長や海外教会長など22名が受講しました。今回はよろづよ八首と九下り目の手振りを丁寧ていねいに学びました。

また宮森先生によるお手直しに先立ち、午後2時より受講者全員で自主稽古を行い、基本動作の再確認を行いました。

片山かおり様本部学拍委員に
片山かおり大教会長夫人には、このたび本部の学生担当委員会委員に指名されました。任期は3ヶ年。

天理教青年会総会

第95回天理教青年会総会は、10月27日午前10時より本部中庭で開催され、本島分会(片山秀明委員長)より57名が参加しました。

午前8時に詰所写真の間に集合し、大教会長より「昨年の100周年で頂いた3つのポイント①自主性②道を楽しむ③世界たすけをキーワードにこれからも活動を進めていきましょう」とお話を頂きました。



訃報

大松峰分教会初代会長夫人

松下ワカエ姉

松下ワカエ姉(大松峰分教会初代会長夫人)は10月2日午後10時35分お出直しになりました。享年101歳。

葬儀はみたまうつしが10月4日午後6時より、告別式が翌5日午前10時30分より、宮路和徳霊峰分教会会長齋主のもと、大分市内の葬祭場にて執り行われました。本年8月1日に満100歳を迎えられ、内閣総理大臣・大分県知事・大分市長よりそれぞれ表彰して頂いてからのお出直しとなりました。

ろくぢ云

(立教182年10月分)

- ▼本島△片山幹太・片山かおり・香葉子・幹太郎・好次・昇太△片山秀明△長尾真美・幸太△藤山さちよ
 - ▼樺太分教会
 - ▼本樺△大上ほの香・はる香・太吉
 - ▼本浜△片山清枝・正枝・誠
 - ▼本攝分教会
 - ▼崇徳分教会△高垣ひかり
 - ▼ポートランド教会△片山和信・陽子・昇慶・竜次
 - ▼シートタック教会
 - ▼カリフォルニア教会
- ご芳志に厚くお礼申し上げます

11月ひのきしん派遣依頼

【総務部】

〈大教会・食堂ひのきしん〉

- 期間：11月21日～22日
- 派遣教会：本浜②、本九台①
- 〈詰所・食堂ひのきしん〉
- 期間：11月24日20:00～26日13:00
- 派遣教会：渋谷②、安藝本中①

事情はいづ

立教182年10月、本島関係のお運びはありませんでした。

おとぎの理拝戴

(立教182年9月分)

- ▼本島△文岡はな ▼本盛濱
- △阿部透真 ▼本水島△山下裕佳
- ▼吉峰△日永祐人

【計4名】

修養科第939期修了

(立教182年9月27日修了)

- 本盛濱 阿部透真
- 吉峰 日永祐人
- 雄福峰 船尾清子

【計3名】

教人資格講習会修了

(立教182年9月10日修了)

御幸濱 後藤正樹

【計1名】

三日講習会履修者

(立教182年5～8月開催分)

- 三日講習会I履修者
- 本千代1、吉松峰1、エヌ・シー1

【計3名】

- 三日講習会全課程修了者
- 本島 朝田奈美

【計1名】

をびや許し

(立教182年9月分)

- ▼月見山△大野原由香

【計1名】

証拠守り下附

(立教182年9月分)

- 本田中1、本樺1

【計2名】

大教会長動向

▼11月(予定)▲

- 2日、香川教区役職者会議
- 3日、女子青年大会
- 3日～4日、本水島分教会 鎮座奉告祭

- 5日～13日、ハワイ巡教
- 10日、ホノルル教会

- 15日、教会長おやさど研修会 委員会
- 16日、本亀分教会 創立100周年記念巡教

- 17日、本府中分教会巡教
- 22日、大教会月次祭執行

- 23日、青年会本島分会総会
- 24日、修養科総立ちまなび
- 25日、かなめ委員会
- 26日、本部月次祭参拝
- 27日、かなめ会

以上

おとぎのお取り次ぎ報告

(立教182年10月22日)

- 提出教会 26教会
- 報告数 1、563回
- 累計 15、147回

※前年同月累計比 45.9回減

統計 (9月1日～30日)

教会名	初席	中席	委子座	修養科	教人講習	検定講習	にをいがけ名簿提出教会 (10月)		
							本島	本日米	豪峰
本島			1				0	7	61
本幸濱					1		30	2	4
本盛濱			1	1			6	1	29
本同朋	1	1					20	1	38
本水島			1				5	3	20
本小倉			1	1			17	2	12
本吉峰			1				3	1	3
本神峰							61	2	17
本豪峰				1			15	27	4
本雄福							30	2	48
本栄森							3	49	9
本大隅		1					3	1	
本別吉		3					5		
本松峰									
合計	6	7	4	3	1	0	計 35 教会		538 名



おめでとう 慶事

西森孝子さん(栄森峰分教会)と小林俊彦氏(社大教会所属)の結婚式が10月6日、本部教祖殿で執り行われました。なお、結婚後の姓は西森としました。



立教183年心定め提出

【総務部】

- 立教183年心定めは、11月22日までに、直轄教会ごと所定の用紙にて大教会長へ提出して下さい。

会計部より

【会計部】

- 大教会総合会費は1ヶ月4,000円(年額48,000円)です。各会のスムーズな運営のため、遅れないよう、大教会会計部へお納め下さい。
- 立教183年お鏡料・献料・御神酒料一教会2,000円です。本年12月22日までに、大教会会計部へお納め下さい。

青年会本島分会総会

【青年会本島分会】

- 日時：11月23日(祝)
- 会場：本島大教会

みちのだい感話大会

【婦人会本部】

- 11月24日(日)13時、南右第二棟地下2階(多目的ホール)
- 1月26日(日)15時、東講堂
- 入場無料、どなたでも参加できます
- 別席強調期間：10月20日～11月30日
- 1人が2人の会員を(今私にできること)

布教の家入寮者募集

【布教部】

- 願書配布：11月25日開始
- 願書受付：1月25日午前9時より2月25日午後4時
- お問合せ：天理教布教部布教一課
Tel 0743-63-2243

九州ブロック「地域の集い」

【教会長子弟育成委員会】

- テーマ：「共に道をつないで」
- 日時：11月10日(日) 午前10時より午後3時30分
- 会場：赤峰分教会福岡布教寮 福岡市中央区清川2-6-5 (JR博多駅西鉄天神駅より徒歩20分) 電話：092-791-3642
- 対象：教会長子弟に限らず、どなたでも参加できます
- 内容：ワークショップ、親睦会
- 参加費：500円
- ご連絡、お問合せは下記担当委員まで 原口実(090-4533-4973) 雲庵春彦(090-2515-8039) 宮路和徳(090-3739-3414)
- 参加申込みの締切はございません

天理教災害救援募金

【天理教災害対策委員会】

- 「令和元年台風19号」災害救援募金
- 募金期間：令和元年10月18日から令和2年1月10日まで
- 現金書留の場合 〒632-0015 天理市三島町1-1 天理教道友社「天理教災害救援募金」係
- 郵便振替の場合 00930-7-329329「天理教道友社」 ※通信欄に「天理教災害救援募金」と明記してください。
- 銀行振入の場合 南都銀行天理支店 普通預金2332239 「天理教災害救援募金」 ※南都銀行本店・支店間の窓口での振り込みについては手数料はかかりません(他行からは手数料が必要です)。なお、10万円以上の現金を振り込まれる場合は、身分証明書の提示が必要となります。
- ご持参くださる場合 天理市内の道友社1階カウンターおよび道友社各販売所、東京支社で受け付けています。
- 「現金書留の場合」「ご持参くださる場合」に関しては、受け付け次第、受領証を送付、またはお渡しさせていただきます。

<https://www.honjima.com/>

本島大教会ウェブサイト

関東ブロック「地域の集い」

【教会長子弟育成委員会】

- テーマ：「共に道をつないで」
- 日時：11月17日(日) 午前10時より午後3時
- 会場：本京分教会 東京都練馬区栄町11-6 (西武池袋線江古田駅徒歩7分) 電話：03-3991-0401
- 対象：教会長子弟、信者子弟、ほか関東地域にお住まいの方、どなたでもご参加下さい(18才～60才位まで)
- 内容：講話、班別ミーティング、感話、親睦会
- 参加費：500円
- ご連絡、お問合せは下記担当委員まで 沖野一道(03-3362-3253) 後藤正治(0465-22-8813) 吉田晴雄(0436-22-8648)

学生おせちひのきしん隊

【本島学生担当委員会】

- 期間：1月4日(土)～7日(火)
- 参加対象：高校生、大学生、大学院生、短大生、専門学校生で、全期間参加できる人
- 宿泊：本部施設
- 参加費：2000円
- 申込締切：12月13日日本部学担必着
- 詳細については、池田さわみ本島学生担当委員長まで

青年会ひのきしん隊

【青年会本島分会】

- 【ひのきしん隊本隊】
- 期間：2月1日から2月24日まで
- 集合：1月31日、本島詰所
- 貸与物品：ヘルメット・作業服・ハッピー・帯
- 携行品：保険証、日用品、作業用ベルト、作業用靴下、履き物(日常用・作業用・サンダルあれば便利)、ネクタイ、カッターシャツ、スラックス、白靴下、筆記用具
- 参加対象：高校生(17歳)以上の男子。青年会層以上(41歳以上)でも大歓迎
- 宿泊先：〒632-0012 天理市豊田町200-1 第百母屋青年会ひのきしん隊
- 【ひのきしん隊3日隊】
- 期間：2月14日午後3時から2月16日午前8時まで
- 詳細については青年会本島分会委員まで